文献調査とフィールド調査による準体研究の展開

坂井　美日
（国立国語研究所／日本学術振興会特別研究員PD）

1

1. はじめに：本発表が扱う現象—準体の変化—

- 古典語では、連体形の節が、単独で名詞相当の振る舞い。
- 現代（の多くの方言）では、準体助詞が必須。

(1) 古典語：[散りたる]φを多く拾ひて（源氏・竹河）
　→現代訳：[散っている]のを多く拾って

(2) 古典語：[乱れ落つる]φがいと口惜しう（源氏・竹河）
　→現代訳：[乱れ落ちる]のがとても惜しく

歴史研究の課題：＜φ→準体助詞＞の経緯、仕組み、動機

- この課題は、文献と方言（フィールド）のいずれか片方だけでは、解決することが困難。
- 二つの研究手法を掛け合わせることで、課題にアプローチ。

2

2. 観察対象・定義

3

2. 観察対象・定義

【準体】

- 文法的に、名詞相当に振る舞う（体言に準ずる）句節。
- 文法的名詞化(grammatical nominalization)に相当。
- 標準日本語では、連体形の節（終止連体形含む。以下「連体形節」）に、準体助詞（名詞化の文法要素）「の」を付す。

【観察対象】

- 本発表では、節を名詞化したものを対象とする。

(3) a. 本がある。＜名詞句＞
　　b. 私のがある。＜句の名詞化＞
　　c. 私が作ったのがある。＜節の名詞化＞

4

【対象とする文法環境】
- 準体は、あらゆる文タイプの、項にも述部にもなる。
- 典型をみる目的から、用言述語文の項に限定。

(4) a. 私が作ったのがある。＜用言述語文・項＞
b. 私が作ったのはケーキだ。＜名詞述語文・項＞
c. その時は私が作ったのだよ。＜ノダ文・述部＞
d. 私が作ったので、誰も食べなかった。＜従属節・述部＞

【枠組み（分類）】

枠組み		意味	
		形状物	事柄
形態統語	準体助詞	散ったのを拾った。	散ったのを悲しんだ。
	ゼロ	散ったφを拾った。	散ったφを悲しんだ。

5

本発表の構成

1. はじめに
2. 観察対象・定義
3. ゼロ準体からノ準体—文献再検証—
   3.1. 先行研究と問題点の整理
   3.2. 文献再検証
4. ゼロ準体から準体助詞準体—方言の観察—

6

3. ゼロ準体からノ準体—文献再検証—

7

3.1. 先行研究と問題点の整理

- 文献学から以下の見解。未だ議論が多く、不明点多い。

(5) 変化の大筋
・時期…室町末・江戸初～明治より前
・直接要因…いわゆる「連体形と終止形の合流」

(6) ノ準体の発達…2説
Ⅰ. 形状タイプ先行発達説
Ⅱ. 形状・事柄同時発達説

(7) ノ準体の発生…2説
Ⓐ 形状タイプ発生説
Ⓑ 形状・事柄両タイプ同時発生説

8

3.1.1.変化の大筋について…信太(1970;1976;1987;2006)等

(5) 時期…室町末・江戸初～明治より前（16C末17C初～19C頃）
直接要因…いわゆる「連体形と終止形の合流」

【先行説の主張(要因)の概要】
- 元々の連体形の機能…1.連体修飾、2.名詞化（準体）。
- 文終止を連体形が主に担い、終止形衰退（いわゆる合流）。
- 連体形で機能競合。名詞化機能の衰退（＝ゼロ準体衰退）。
- 名詞性の補償（再名詞化）のため、準体助詞が発生発達。

(8) 信太2006、p.30
「衰退した機能を補償するものとして「の」が成立したと一般に考えられている。」

9

3.1.1.変化の大筋について…問題点

疑問：直接要因は、連体形と終止形の合流なのか？

【文献学からの疑問点】（柳田1993、青木2005、坂井2015等）
- 連体形と終止形の合流は、古典文献上、12C頃から。
- 準体助詞の発生は、古典文献上、16C末17C初頃。
- 変化が終わるのは、更に200年以上後。
  …直接要因にしては、変化までの期間が長すぎる。

【フィールドからの疑問点】（柴谷2010、坂井2015等）
- 現代方言を見ると、連体形と終止形に区別が無いも関わらず、ゼロ準体を持つ方言がある（島根方言等）。
  …反例の存在。

再検討の必要あり

10

3.1.2. 変化の経緯についての議論

(9) ノ準体の発生
Ⅰ. 形状タイプ先行発達説（原口、金水等）
Ⅱ. Ⅰ否定説（田口等）

(10) ノ準体の発生
Ⓐ 形状タイプ発生説（青木2005等
Ⓑ 形状・事柄両タイプ同時発生説（吉川1950等）

11

ノ準体の発達Ⅰ説：形状先行

- 18C、19Cの文献の計量調査から、以下の報告。

(10)原口(1978), p.449
「明和より安永に至る（注：18C）洒落本類では、受け型（注：形状タイプ）に準体助詞「ノ」を接続する形が多くなる。」
(11)金水（1995), p.82：『浮世床』(19C)の調査
「形状性名詞句（注：形状タイプ）の場合には「の」が挿入される場合が圧倒的に多い。（中略）ところが、作用性名詞句（注：事柄タイプ）では、「の」が入らない例の方が多い。」

Ⅰ説：18C19C段階で、形状タイプのノ準体の発達が進んでいる。

12

ノ準体の発達Ⅱ説：Ⅰ否定

田上(1999;2000;2001;2002)

- 同時期18C19Cの文献を再調査し、原口(1978)等に反論。

(12)田上(1999), p.449（用語説明の部分は中略）

「本稿の整理によるA（注：形状タイプ）において、本稿の整理によるB（注：事柄タイプ）よりも早くに、連体形準体法（注：ゼロ準体）が準体助詞「の」に取って代わられている、という観察は、動詞文においても形容詞文においてもできない」

Ⅱ：18C19C段階で、形状タイプが先行発達したとは言えない。

同時期の文献調査で全く異なる2説

13

ノ準体の発生Ⓐ説：形状タイプで発生

- 青木(2005)は、原口(1978)、金水(1995)等、発達Ⅰ説の報告をもとに、形状タイプで準体助詞が発生したとする。

(13)青木(2005), p.54

「〈モノ〉〈ヒト〉を表す同一名詞準体（注：形状タイプ）と、〈コト〉を表す同格準体（注：事柄タイプ）では、前者の方から先に「ノ」の付接が始まったと考えられる（原口1978、金水1995等）」

【補足】なお青木(2005)は、上記説を更に展開し、当初の「の」をモノヒト代名詞と分析し、その文法化で準体助詞が成立したと述べる。

(14)「「ノ」は、ある種の指示代名詞であると考える。」P.57

(15)「ノ」は＜モノ＞をあらわす代名詞が文法化し、＜コト＞をあらわす形式に拡張したものである。」p.47

14

ノ準体の発生Ⓑ説：両タイプ同時

- 吉川氏の報告によると、ノ準体が見られはじめるのは、16C末・17C初で、元禄(18C初)まで、その出現は非常に稀。
- その間、タイプによる出現の差は、認められない。

(16)「発生的に『物』を表はすものと、『事柄』を表はすものと、どちらが先んじてゐるか、判断が下しえない」(p.30)

(17)両タイプの初期の例（元禄以前）

a. おなごの綺量のよさ相なのを見たてて

（『色道諸分難波鉦』：延宝八）

b. 姫が肌に父が杖をあてて探すのこそ悲しけれ

（『貴船の本地』：万治年間）

15

3.1.3 問題点の整理

1. 発生のⒶⒷ2説は、いずれも決め手に欠ける。

Ⓐ 形状タイプ発生説…18C以降の後世の様相を根拠に推定

- Ⓑを覆す17C以前の実証は、見つかっていない。
- 根拠とする原口1978等に田上氏の反論がある。その処理が必要。
- 18C19Cのデータだけで、変化の全体像を推定する事は困難。

Ⓑ 形状・事柄両タイプ同時発生説…17C以前の実際の初出

- 文献上の初出が、実際の初出時期と合わない可能性。
- 資料の信頼性に問題（吉川氏の挙例には、諸本の異同があり、底本の成立も、江戸初期よりかなり下った後世。）

2. 発生のⒶⒷ2説は、扱う時期にひらき。間を埋める必要。

16

3.1.3 問題点の整理

3. 地理的変異という観点の欠如。それによる混乱。

(9) ノ準体の発達…2説

Ⅰ. 形状タイプ先行発達説（原口、金水等） 江戸

Ⅱ. Ⅰ否定説（田上1999;2000;2001;2002等） 混在

(10) ノ準体の発生…2説

Ⓐ 形状タイプ発生説（青木2005等） 江戸

Ⓑ 形状・事柄両タイプ同時発生説（吉川1950等）

上方（関西）

17

従来の間違った認識

(18) 信太（1995), p. 79

「前期上方語と後期江戸語とを連続するものとして捉えてもそれほどの誤差は生じないであろう」

- 言語の多様性が注目されている昨今、受け入れがたい手法。
- 変化と変異の混在を排除しない限り、論争は終わらない。

必要な再検証作業
- 「変異」を考慮した文献調査。
- より細かい時期区分で変化の全体像を検証。

18

3.2. 文献再検証

19

文献での再検証

【方法】
- 江戸（東京）文献と、上方文献を分ける。口語資料を対象。
- ノ準体がまとまって現れはじめる元禄から、近代までを調査。
- 約30～50年間隔で区切ってデータを採集する。
- 形状タイプと事柄タイプそれぞれの、ゼロ準体とノ準体の割合を調べる。

（分析方針）
- 形状タイプか事柄タイプか議論がある「主部内在節」は保留。
- 解釈により形状タイプにも事柄タイプにもとれるものは保留。

20

調査資料	江戸ー東京	上方（関西）
近世中期Ⅰ 元禄 - 宝永(1700頃)	（十分な文献が無く、データ構築が困難）	近松世話浄瑠璃4作品
近世中期Ⅱ 寛延 - 宝暦(1750頃)		竹本座浄瑠璃1作品、上方洒落本8作品
近世中期Ⅲ 明和 - 安永(1770-1780頃)	江戸洒落本8作品	上方洒落本6作品
近世後期Ⅰ 寛政 - 文化(1800頃)	江戸戯作3作品	上方洒落本9作品
近世後期Ⅱ 文政 - 天保(1820-1830頃)	為永春水人情本2作品	上方洒落本4作品
幕末-明治初期 （1860-1870頃）	仮名垣魯文戯作2作品	一荷堂半水戯作2作品
明治後期 - 大正	東京落語SPレコード文字化資料67作品	上方落語録音文字化資料41作品

21

江戸東京

表１：用例数（江戸）

江戸	形状		事柄		計
例数	ゼロ	ノ	ゼロ	ノ	
近世中期Ⅲ	3	10	13	2	28
近世後期Ⅰ	8	13	41	15	77
近世後期Ⅱ	2	11	20	21	54
幕末・明治初	3	11	9	17	40
明治後・大正	0	41	5	37	83
計	16	86	88	92	282

表2：ノ率（江戸）

江戸ノ率	形状	事柄
近世中期Ⅲ	76.9%	13.3%
近世後期Ⅰ	61.9%	26.8%
近世後期Ⅱ	84.6%	51.2%
幕末・明治初	78.6%	65.4%
明治後・大正	100.0%	88.1%

※ノ率（タイプごと）
ノ準体÷(ゼロ準体+ノ準体)×100

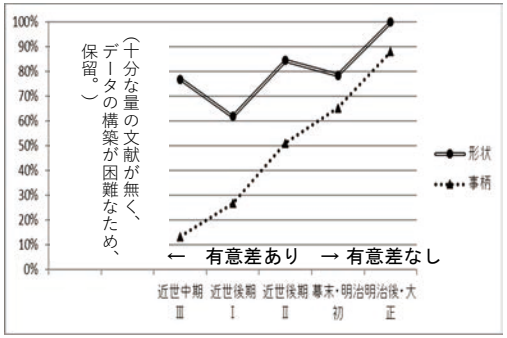


図1：ノ率（江戸）

【江戸・東京】
ノ準体の発達…Ⅰ.形状タイプ先行発達
（発生については、江戸文献上では不明）

22

上方（関西）

表3：用例数（上方）

上方	形状		事柄		計
例数	ゼロ	ノ	ゼロ	ノ	
近世中期Ⅰ	14	3	17	2	36
近世中期Ⅱ	11	7	14	3	35
近世中期Ⅲ	12	5	29	10	56
近世後期Ⅰ	6	17	37	15	75
近世後期Ⅱ	1	4	17	5	27
幕末・明治初	2	14	21	26	63
明治後・大正	0	15	0	13	28
計	46	65	135	74	320

表4：ノ率（上方）

上方ノ率	形状	事柄
近世中期Ⅰ	17.6%	10.5%
近世中期Ⅱ	38.9%	17.6%
近世中期Ⅲ	29.4%	25.6%
近世後期Ⅰ	73.9%	28.8%
近世後期Ⅱ	80.0%	22.7%
幕末・明治初	87.5%	55.3%
明治後・大正	100.0%	100.0%

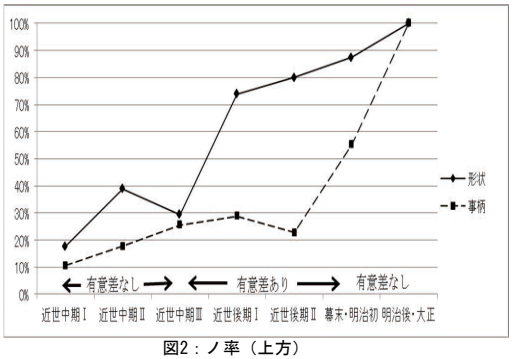


図2：ノ率（上方）

【上方】ノ準体の発達
- 形状タイプは、近世後期Ⅰでノ率7割超え。
- 事柄タイプは、明治初期までノ率5割止まり。

⇒Ⅰ.形状タイプ先行発達

23

上方（関西）

表3：用例数（上方）

上方	形状		事柄		計
例数	ゼロ	ノ	ゼロ	ノ	
近世中期Ⅰ	14	3	17	2	36
近世中期Ⅱ	11	7	14	3	35
近世中期Ⅲ	12	5	29	10	56
近世後期Ⅰ	6	17	37	15	75
近世後期Ⅱ	1	4	17	5	27
幕末・明治初	2	14	21	26	63
明治後・大正	0	15	0	13	28
計	46	65	135	74	320

表4：ノ率（上方）

上方ノ率	形状	事柄
近世中期Ⅰ	17.6%	10.5%
近世中期Ⅱ	38.9%	17.6%
近世中期Ⅲ	29.4%	25.6%
近世後期Ⅰ	73.9%	28.8%
近世後期Ⅱ	80.0%	22.7%
幕末・明治初	87.5%	55.3%
明治後・大正	100.0%	100.0%

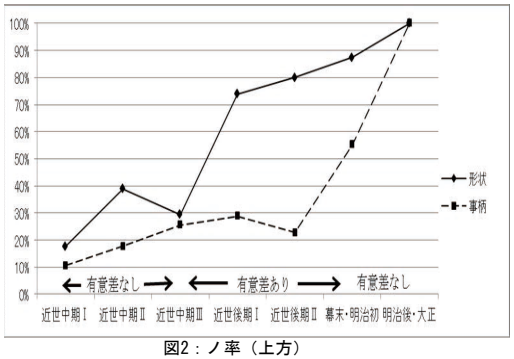
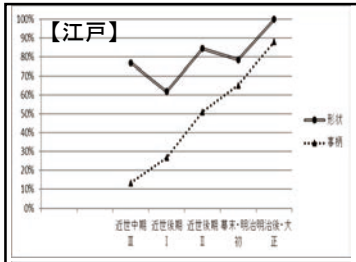


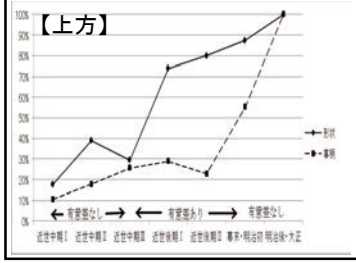
図2：ノ率（上方）

【上方】ノ準体の発生の推定
- 近世中期Ⅲ（18C末）までタイプ差なし。

⇒16C末から200年間、差のない状態が継続。
⇒Ⓑ 同時発生説が穏当

24





文献再検証のまとめ

方言を考慮し、観察時期を増やして変化の全体を描くことで、以下の結論を得る。

【江戸】

- （江戸のノ準体発生は、文献上では不明）
- ノ準体の発達…Ⅰ. 形状タイプ先行発達

【上方】

ノ準体の発生…Ⓑ同時発生とみるのが穏当

- ノ準体の発達…Ⅰ. 形状タイプ先行発達

25

【先行説の修正】

- 江戸と上方の変化は、明らかに、時期も様相も異なる。(18)のように混在させる方法は採用できない。
- 発達のⅡ説（Ⅰ説否定）は、江戸・上方ともに、採用できない。
  Ⅱ説の背景には、方言の混在による、データの不整備。
- 発生のⒶ説（形状からノ準体発生）は、少なくとも上方については、考えにくく、Ⓑ説（同時発生）が穏当。
- 発生当初の「の」を、モノヒト代名詞とみる説も再検討の必要。
  （属格「の」由来＝指示範囲を持たない要素であったと考えるのが穏当か[注1]）
- （細かい修正点）変化時期の推定(5)にて、変化の終了時期が「明治より前」とされていた点は、江戸・上方ともに、大正期（20C頃）に修正される。

26

ここからの課題：現象の個別or共通

- 文献から変化の様相を描く手法は、長期の文献の蓄積がある江戸と上方には有効。しかし他方言のことについては、厳しい。
- 江戸も上方もノを発達→文献上分かるのは、「ノ準体の歴史」のみ。

【課題】

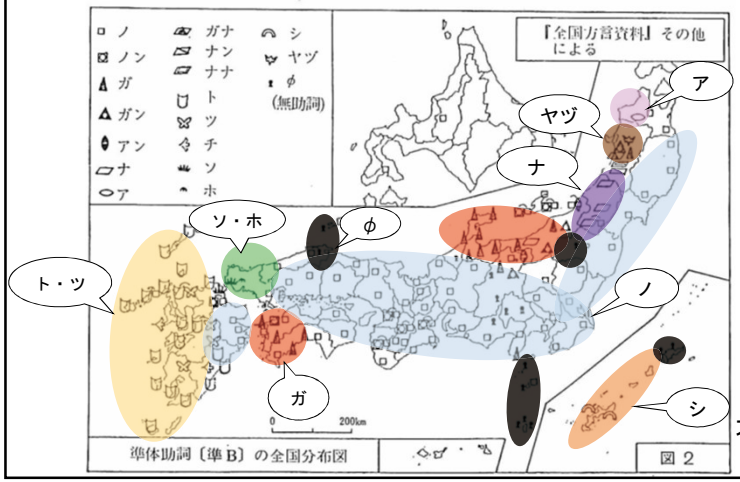
- 上方も江戸も、ゼロから準体助詞準体へ移行した。
  課題1. この方向は、ノ準体を発達させた方言個別の現象？準体共通？
- 上方では当初、「の」が意味タイプに関わらず節末に付きはじめた。
  課題2. 準体助詞の発生において、意味タイプが関与しないのは個別？
- 江戸と上方は共に、形状タイプから先に、ゼロ準体を失い、準体助詞準体を発達させた。
  課題3. このプロセスは、ノ準体個別？準体共通の現象？

27

4. 日本諸語・諸方言の準体の観察

28

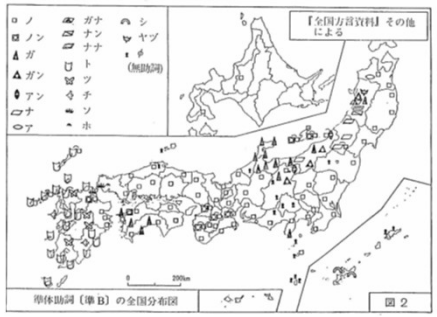
日本諸語・諸方言には、多くの準体形式がある。



大野（1993）p. 37

4.1. 上方と江戸に見られた、＜ゼロから準体助詞準体＞へという方向
…個別の現象 or 準体共通？

- 方言学の先行研究において、周圏分布の観点から＜φ→準体助詞＞の前後関係が推定されている（大野1994）。
- ゼロ準体を失う方向にある方言は存在するが（宮古、出雲）、ゼロ準体を生産的な形式として獲得する方向にある方言は未見。



大野（1993）p. 37

＜ゼロから準体助詞準体＞へという一方向性がある可能性大

4.2. （上方のように）準体助詞の発生において、意味タイプが関与しないというのは個別の現象？準体共通？

- 日本諸語・諸方言の準体助詞をみると、語源不明のものも多いが、中には、形状物名詞句もしくは、形状物指示の形態素から来ていると考えられるものがある。
  （例）ヤヅ（秋田方言等、奴）、ムヌ（宮古語等、者・物）、ス（宮古語等、人指示）等
- これらは、「意味タイプに関わらず連体形節末に付きはじめた」のではなく、形状物名詞句を主要部とする連体修飾構造をもとに、その主要部名詞句の文法化によって、準体助詞準体を獲得したと考えられる。→準体助詞準体は、形状タイプから発生

準体助詞発生の意味タイプの関与如何は、
何から準体助詞を獲得するかによる、個別の現象。

例：宮古語のmunu

- 語源は、者・物と考えられる。
- 城辺方言のmunuは、者・物の範囲しか指せず、元の名詞の範囲(19)。
- 伊良部仲地方言のmunuは、形状物も事柄も意味によらず使用可(20)。
  …後者は、munuを文法要素（準体助詞）として獲得している。

(19) 宮古語・宮古島語・城辺方言（昭和生まれ）

a. kau-taa munu=mai a-ï.
買-PST munu=ADD 有る-THM.NPST.
「買ったのもある。」＜形状物＞

b. Ami=nu fuï-taï {*munu / φ} =mai s-sa-n=na?
雨=NOM 降る-PST=ADD 知る-THM-NEG=Q?
「雨が降ったのも知らないか？」＜事柄＞

例：宮古語のmunu

- 城辺方言のmunuは、語源と考えられる者・物の範囲のみ指示可(19)。
- 伊良部仲地方言のmunuは、形状物も事柄も意味によらず使用可(20)。
  …munuを文法要素（準体助詞）として獲得している。

(20) 伊良部島伊良部（昭和生まれ）

a. bar-i-i+bu-ï=munu=mai　　a-ï
割-THM-SEQ+PRF-THM.NPST=munu=ADD　有る-THM.NPST
「割れているのもある。」＜形状物＞

b. taro=ga　jamato=nkai
太郎=NOM　日本本土=ALL
pi-ï= {munu=u / ϕ=zu} =ba　　ssuzzibuïmu?
行く-THM.NPST= {munu=ACC / ϕ=ACC} =TOP　知っているか
「太郎が大和に行くのを知っているか。」＜事柄＞

33

4.3. 上方と江戸は、形状タイプから先にゼロ準体を失い、準体助詞準体へ
…これは、ノ準体を持つ方言の個別の現象？準体共通の現象？

考察材料：日本諸語・諸方言の準体体系の類型（ゼロの可不可）

ゼロ準体の可不可	形状タイプ	事柄タイプ	有無
A型	○	○	有…島根など
B型	×	○	有…城辺、鳥取など
C型	○	×	無
D型	×	×	有…現代標準語など

A. 形状タイプと事柄タイプの両方で、ゼロ準体を使う
B. 形状タイプではゼロ準体を使えないが、事柄タイプは使える
C. 形状タイプはゼロ準体を使えるが、事柄タイプはゼロ準体を使えない
D. 形状タイプと事柄タイプの両方がゼロ準体を使えない

34

(21) A型例：島根方言（飯豊ほか編1981）
形状：お芋の焼いたϕがあーけん。
「お芋の焼いたのがあるから。」
事柄：騒ぐϕが面白かった。
「騒ぐのが面白かった。」

ゼロ可不可	形状	事柄
A型	○	○
B型	×	○
C型	○	×
D型	×	×

(22) B型例：伊良部仲地方言
形状：bar-i-i+bu-ï= {su / munu / *ϕ} =mai　　a-ï
割-THM-SEQ+PRF-THM.NPST= {su / munu / *ϕ} =ADD　有る-THM.NPST
「割れているのもある。」
b. 事柄：taro=ga　jamato=nkai
太郎=NOM　日本本土=ALL
pi-ï= {su=u / munu=u / ϕ=zu} =ba　　ssuzzibuïmu?
行く-THM.NPST= {su=ACC/munu=ACC/ϕ=ACC} =TOP　知っているか
「太郎が大和に行くのを知っているか。」

35

ゼロの可不可	形状タイプ	事柄タイプ	有無	方言と形式の例（一部）
A型	○	○	有	島根など
B型	×	○	有	伊良部「す」vsゼロ 伊良部「むぬ」vsゼロ 鳥取「の」vsゼロetc.
C型	○	×	無	―
D型	×	×	有	標準語「の」，関西「の」，福岡「と」，土佐「が」，山口「そ」etc.

【階層性】
- 事柄タイプにゼロ準体がないならば、形状タイプにもない。

→3.1.の「変化の一方向性（ゼロ→準体助詞）」を踏まえると、
＜ゼロ準体を失う場合は、形状タイプから＞が導けるか。

36

4節まとめ

【仮説】

a. 変化の一方向性

準体の形態変化が起こるとすれば、ゼロ準体→準体助詞準体。

b. 階層性

事柄タイプにゼロ準体がないならば、形状タイプにもない。

→ゼロ準体の消失は、形状タイプから起こる。

➢一連の変化の直接要因はどこに？

- 「連体形と終止形の合流」を直接要因と考えにくいことは先述[注2]。
- 準体助詞側？形状タイプゼロ準体側？

→準体助詞を何から獲得するかは、方言によって様々異なるため、準体助詞（の語源）側に共通の動機があるとは考えにくい。

→一連の変化の要因は、形状タイプゼロ準体そのものにあるか。

37

今後の課題：形状タイプ準体が形態変化をおこす動機

可能性：形状タイプゼロ準体の「ヘッドレス」再解釈？

- ゼロ準体は元々、名詞節であるが、連体形で構成された節という点で、連体修飾節と外形が同じ。

→＜主要部が欠けた連体修飾節＞との再解釈が起こった場合、節末を有形要素で埋めようとする動き？

[焼いた]がある。→[[焼いた]Φ?]がある→[[焼いた]の]がある。
名詞節　　主要部が欠けた連体節？

- 形状タイプで変化が先行したという点については、形状タイプゼロ準体が、事柄タイプゼロ準体に比べ、連体修飾節解釈されやすい背景を複数持つか。

38

形状タイプゼロ準体が、ヘッドレス解釈されやすい背景？

1. 連体形の修飾用法（連体修飾）と名詞化用法（準体）との関係性

- 事柄を指す場合、連体修飾と準体は、主節述部で住み分けがあり、（工藤1985、渡辺2008等）この住み分けは、通時的に認められる（青木2005、金水2011等）。

(23)a. 行った｛事／*の｝がある。

b. 火が消えた｛*事／の｝が見えた。

- 形状物を指す場合、このような統語的な住み分けはない。

(24)昨日買った｛本／の｝を読んだ。

→形状タイプ準体のほうが、連体修飾と準体の境界が曖昧。

39

形状タイプゼロ準体が、ヘッドレス解釈されやすい背景？

2. 意味的主要部のねじれ

- 事柄タイプゼロ準体は、事態を表す動詞節で、事態を指す。

(25)[花が散った]を見た。

- 形状タイプゼロ準体は、事態を表す動詞節で、形状物を指す。

→「形状物を指す主要部が欠けている」と再解釈されやすい？

(26)[地面に散った]を拾った。

→[地面に散った]Φ?を拾った。

- 形状タイプ準体が形態変化をおこす動機については、継続課題。
- 何をきっかけに形状タイプの再解釈が起こるのか、そこに共通要因があるのかどうかも、現段階では未解決。

40

参考文献

青木博史(2005)「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3, 武蔵野書院

飯豊毅一・佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄・白沢宏枝編 (1981)『方言談話資料(4)—福井・京都・島根—』国立国語研究所

石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店

大野小百合 (1993)「現代方言における連体格助詞と準体助詞」『大阪大学日本学報』2号、大阪大学

工藤眞由美(1985)「ノ, コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』50-3

金水敏(1995)「日本語史からみた助詞」『月刊言語』24-11, 大修館書店

坂井美日 (2015)「上方語における準体の歴史的変化」『日本語の研究』11-3

信太知子(1970)「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82

—(1976)「準体助詞「の」の活用語承接について—連体形準体法の消滅との関連」『立正女子大国文』5

—(1987)「『天草版平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究第七集』, 武蔵野書院

—(1995)「近世後期の連体形準体法 - 上方洒落本を中心に - 」『神女大国文』6, 神戸女子大学国文学会

—(2006)「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句構造の観点から」『神女大国文』17

41

参考文献

柴谷正良(2010)「理論研究と方言研究をつなぐ—準体助詞の機能と展開」研究会発表資料

田上稔(1999)「準体助詞「の」について」『女子大国文』126

—(2000)「明和安永期洒落本の準体法」『女子大国文』128

—(2001)「寛政期洒落本の準体法」『女子大国文』130

—(2002)「後期洒落本の準体法」『女子大国文』132

原口裕(1978)「連体形準体法の実態—近世後期資料の場合—」『春日和男教授退官記念　語文論叢』、桜楓社

柳田征司(1993)「無名詞体言句から準体助詞体言句（「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」）への変化」『愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部人文・社会科学』愛媛大学教育学部

Yap、 Foong Ha、 Karen Grunow-Harsta and Janick Wrona(eds.) (2011) Nominalization in Asian Languages:Diachronic and Typological perspectives. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

42

【注1】準体助詞「の」の起源代案（坂井2015）

当初の（室町～近世中期の、稀にしか出現しない）連体形節＋「の」が、属格由来の過剰要素であったと考えれば、意味に関係なく両タイプに現れたことを説明しやすいか。

1. 属格句は元来、単独で名詞位置に立てるが(19)、中古に稀に、属格＋のとも分析しうる「わがの」の例が出現し(20)、その後、中世末-近世初期に、ガ属格句に過剰に「の」を付す例が散見する(21)。（一人称の語形変化の影響があると考えられる。）

(27)属格句の名詞用法（上代以降、現代まで）

a. ［わ=が]=を「私のを」（落窪）
　我=属格=対格

b. ［誰=が]=を「私のを」（落窪）
　誰=属格=対格

(28)「わがの」（わ=が=の?／わが=の?）
　［わ(=)が=の]=と「私のと」（好忠集：中古中期ごろ）

(29)属格句＋「の」の名詞用法
　［[伊勢=が]=の]=が「伊勢のが」（耳底記:15C）（中世末～近世）
　伊勢=属格=？=主格

43

2. 属格句と連体形節は、機能の面で通じる（連体修飾、名詞化）
　→＜属格句＋「の」＞から＜連体形節＋「の」＞への類推か。

(30)属格句＋「の」：[[伊勢が]=の]=が「伊勢のが」（耳底記:15C）
　属格句=？=主格
　連体節＋「の」：[[惚れた]=の]=が「惚れたのが」（筒井筒）
　連体形節=？=主格

- 属格句と連体節との関連から準体助詞の発生を考える説は、これまでにもあるが（三矢1908、柴谷2010等）、先行説が、その発生について積極的に再名詞化機能を見出すのに対し、発表者は、当初200年間の「の」は、誤用にも近い過剰要素だったとみる（あまりにも長期間、頻度が低すぎる）。
- 当該の「の」を改めて準体助詞として取り込みはじめたのが、近世後期以降と考え、その取り込みは、形状タイプから進んだとみる。

【注2】ただし、準体助詞準体を発達させた方言は、全て連体形と終止形が同形である。直接要因ではないにせよ、関連は現段階では否定しない。

44